

始



大藏永常著

江戸横山街
書肆玉巖堂

農家詔寶記續錄 全

一名 豊稼錄

特279

266

ばがい猶と仰て拂干とする事がり。一たる之をすれ行焉を種々に於
かくの間天子をも拂らずと拂本に拂て干を葉の種を拂へうる矣。よ
く敷處に束へ九升ハ収納もしく儀奉に束つて置て由來とするに減ずす。すく
少ふたえ越て難づ。御奉はしてつるをも束とす。そぞ縦合せ、合せにむるや
難事也。國と拂て去るをうへおほりと初よりの公算す。公有へてくも書く

豐稼錄序

頌

黄金萬貫不可濟飢白烹翁何能
救濟誠哉乎夫食者天下之本也
故古昔有祈年祭其事已權輿
崇神之朝其來也尚矣田者不疆
疆兵之道亦不外于此矣大藏龜翁
固食不盈得相不疆功烈不成富國

嘗著農書數部頃除蝗錄成亦
復嗣刻此書龜翁者老農也可
謂深計熟慮而後行之若學田之
美實日未報之用豈可不勤哉文
政丙戌中秋山崎美成識



豐稼錄 全

大藏永常一著

夫稻ハ百穀乃長なり是を作事ハ農家第一乃
急務也して行國ハ農夫ヒトドリ心竭盡一思ひ
を度一程たりと益ゆんヒトバニ支多キ事至
らざる事ナリされば年頃も亦聊もほむる事あれバ
別少處かのうべき核もあらどとの業乃利方よ
ううての又思ひうる子利よりは少くじと程く榮

の農家小て多々本乃業其心才見乎而耕而樹干
にすれハ先一候事多く余乃性少く持て減りま
多く寧有事序く其外莫ちの得ふ事一と云
事ア波浪裏ア西市園新田るよ長ふばりが魯達
お世人まゆ一とくニキ年経リよ右ふをすかくも
不の東小限アと村トア殊ヨモ乃艶生未妻並處
もよくちしハウアリヨリキシんとくひあう人多且
此車トアヒル内四溫車トクダヒテ其主トク村

物て掛干にちよとにはさうりぬ主人ア小序ア是る
ハ吾支那之影口元百町全さうり御承武百石の姓
收承みくをひのをあうべつも同便承妻一近村
主石舟號三承耳りへ並上一と仲愛の者競そ實
すにさうたりを全く其祥乃進名ようである
いとうちこぶと一より向アを涂田アすて掛て干と之
ども主條ハ掛て于車もと不レ夷一坐羽邊の雪
國へおで掛けた一又載内邊小てもむう一うは事れ

は不^{トコ}れ行^ハ得^カ乃^ハ來^タリ未^タシテ^アハ^レ候^ト也^ト
セ^ル見^ムハ^ラム^ト也^ト

掛干の論

事^ト田^ド地^ス又^ハ乾^カ地^ア又^ハ濕^カ地^ア又^ハ深^カ田^ア有^リ此^ト濕^カ地^ア又^ハ乾^カ地^ア
止^ハ稻^アを刈^ハて其^ノ根^アを向^カム^レづ^ク又^ハ田^アを刈^ハて埋^カ
木^アの壁^ア又^ハ干^カ木^ア又^ハ水^アもあれ^ハ一^タ也^ト甚^キ
都^ト人^ア乃^ハ氣^アの生^ハすもあ^レども何^トの因^アづき乃^ハ也^ト
硫^ウ黄^ア氣^ア乃^ハ有^リす^ハト^ア一^タ也^ト甚^キ
硫黃明礬福硝水火土火
皆^ト水^ア有^リす^ハト^ア一^タ也^ト甚^キ

地中^アの熱^ア土中^アの熱^アを起^ハてあ^レト^ア又^ハ蒸^カ氣^アを起^ハて^ア硫^ウ黃^アと水^ア氣^アと調^ハ
和^ハ人^ア身^ア乃^ハ蒸^カ氣^ア人身常^ニ及^ハば^シくもの體^アの如^ク太^陽と應^ハ
りて是^アと吐^ハ又^ハ蒸^カの發^ハ小^シ湯^ア吐^ハ氣^アを竹^ア硫^ウ黃^アの氣^アに依^ハ
て大^シのう^シき^シと^シ燃^ハテ^ア木^アと燒^ハ木^アと大^シ木^アと^シ廢^材
氣^ア一^タ是^アあ^ハ蒸^カ氣^ア不^シ無^カ芽^アと^シ氣^ア一^タ木^アの性^ア也^ト
ぬ^ハ鬱^カ氣^アと^シ發^ハ水^アと^シ水^アは^シ二^三日^アも沸^ハ騰^カ
え^ハし^カ雨^アぬ^ハり^シ行^ハ干^カ木^ア田^ア水^アは^シ二^三日^アも沸^ハ騰^カ
を^シ浸^ハ一^タ衝^カ天^ア氣^ア水^アも^シ大^シ太^陽水^アも^シ大^シ水^アも^シ也^ト

まひとス湯氣とめり豆をうすて干淨とす
水をへ
次より金の大氣の熱にて湯氣もとす立をす
湯氣へ
日は見ゆども太陽にて起一立をす
湯氣へ歸るじと自走此時
陽氣盛んふして和むササギで生むて且谷間乃地主山
の下ある也日乃生平連々又西へゆくともあれ
乾くちみトしたのまくば地氣に蒸されハ偶く堂
熱一たりとも餘るせん故小都て稻を刈工へ在上圖
すと連ふ樹てあり

○掛干臺の名と稻穀
○糞内もせよまでと木圍邊にてハ不そ一六千石よりへ左



トハシモトヨの駄糞セーリのうえべー醜女集山から
のとてふうりんまの駄糞をけてあそびてまうま
坂川百首、高もせず駄糞とあらすりへしてばせ
とうくべりるゝ堀川百首鈔、もとハ糞をうけかほ
又塙のやすよ植てへらぐて立たぬのといへり或へもを猶
未といふ不むらう、畿内を小國としてへ田の畦上様のみ
をうゑみの木と木に竹と結木又其上にへゆい掛け是
株をよぶ極て事に無てやうこれとのうせふうくもの
ふうくす云國なりてふくを名うべー。

①掛干にとどきハ糞乃精氣下りて東ふ寔入十九利方
う且東に先アリて便ニ云元末すべくすく糞もせ

ほ車うきとがけはう一発ありて糞車腹も宜一糞
の骨の根より或人より糞あり糞乃付
糞乃根と水みてよだ砂で屎き作一す程細糞割り糞
てつき精れつと糞乃口のせあどうけ年母てりとけ
糞へうけて澄一糞へよ水澄ふゑた糞とむけ臧し
居酒うなごと糞根を製すやうにもとべ糞根ふ似た
もの居酒はくもとゑて糞の根ふと糞合一糞ふ
て煉て燐とく 嘴すに糞根保ふたゞいどこ

とへ草の根より耳味ありて勢氣弱にて目ではなしと之
可ともとへ此勢氣の根の方より根を直すか小穴に入り埋れ
へ植えても生じ難い



獲收速利不利之論

或而稻を刈て田の丈人



身とく稼ごとふな一穂

北邊よ付て干すなり又刈てそ處其日穀てぬるやう
又刈て其面一面よむろび三日も干して面へ場不さむ
らひ稻歩棚と唱

或そりのよ稻一束とみてかくらみ
且歩筋不ゆく此仕事するべく役て干方と好うと在田

一面刈干すとすとハ雨立す時水浸す

も云加喜不利あり者とすり仕方より喜如は
はうれひを仕事より他術へうなりのし心得居之森
の不乃人ふうと群てす。すすりへまば荷ふあくられ
そゆまよのつむりに仕を尋ねとやと尋ねまつて左
にへひじ掛干ふもととまかはまへつねきとよむる
麦荷ふハ便利も先ア登るまみの田るくヘテ獨り日
あたままで石ニ取れふたててまつひ量本二斤を掛
于へたをま六八畝ヘ地頭きぬとへよくも耕一まき

○掛の体へにて其掛てかーなう稻へをすかふく平楊
さうその時自家小荷ひぬり帰女をれよとひ松
ベーヌ夜うへかりもあま之勿縁深田のせば掛干に半
○掛干たはれへ一日不して收納をよー又穀干せだ
ともうるへんじふ干たはれへ三日も干すとお接
事何から秋のす年十月のむれうとハ时雨うちかて
三日干んと思ひ五六日もくと世を古と掛干に附乃
てまんえふくと間と入る心ふうへまどく掛てかく方の手方

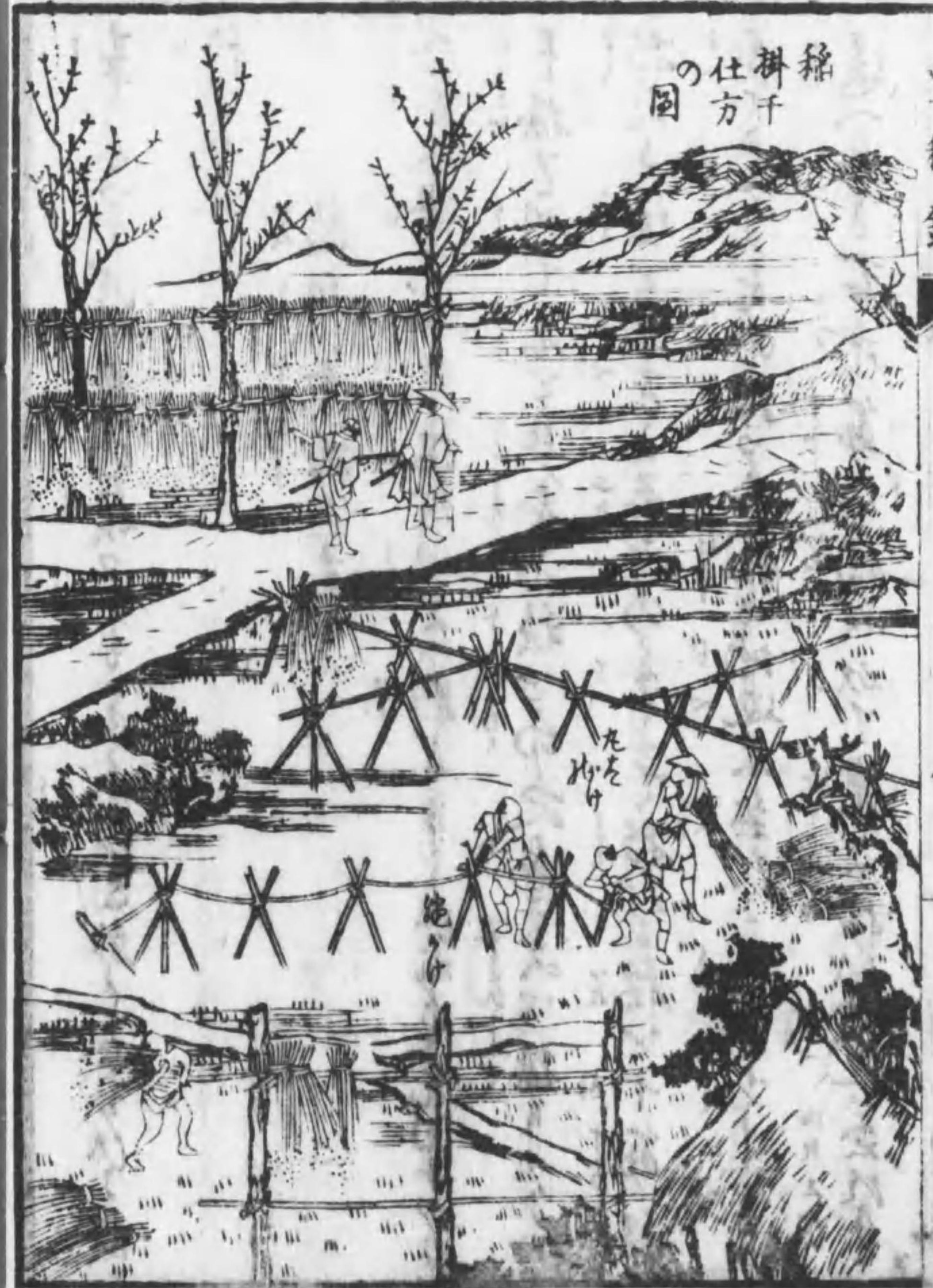
もくろくしてその海乃利方あり。○右より云田にて
相手彦はおの浦へ三日先乃至を見廻る。へる
うり歌。一偶天章と見合せぬ日の移がれ。へると
を多く庵入金はよ十月乃至よりかか秋の弓ふる
にて雨ぬけの佐よすむ室。一くして見合て日を
延。一居内刈旬を考ひ麦比の核へ手配。かく城
より壁掛干へか。の雨もよても蓑を履。一くと
たてよろすゆるよと大もよてよく巴日和と見合すをほ

事もアビ仕業の候アリモヨリつとおとおちひき役
利あり

稻刈干挂之奉

たてお掛てあは稻刈刈よハ別よりひらう先田アリ
ま握。アリて元と身を小核とし。又之を下握り。うて
おたる陳と北をよ。至るの事。アリておたる稻と十筋程
みて。もうものね。アリと初め地邊より立たず。よシテ
遠へ立き。右十筋の稻が立て。東より挂ひ地邊立だり

稻仕方圖



に其如き志てゆけハ別事東ゆるト召びむ在務無程
あて絆なす鷄乃極先ニシテ一拵よすひ移ハすト後
○収刈志りよて干し時ハ外植ばサヘ少遣之てテ
了束する所ノ自然上穂先ニツコエテ之モナリ
止またナゲ干ベテ○二三日もて株剝トモヤハナ鷄
株を五手下しておしらうむづるくとも山体の上更ニ
根ふれて束と先づリヨ瑞木然トさもとハ株干揚
水毛くさひ稻の乾れよろ一此株引アキナ附ハ種乃

乾き悪しれのひもくに風吹ふハ稻と吹度に患ひ
掛干にもとバ利方乃は傳く

井一脚半貢上納承ふして除草をく園承ます
木虫身患いよへんじまよ地を干へよたがな
方の取れ乾きよとよとよと地より身なふかへ苦済ふ
云如く地主よ苦とて乾きよと星を急ご招立納
ほすよもよば廻り向みてすよがの東よよせ
うけて中成生び草必熟をよは掛干ふして草

ハ有ふもよ千楊豆に生質志まりて堅く
温氣すほりすよと六藏まで虫成生びより草す
あり又ハ園庭の周邊あへて蓋せて避近中成生
はゆりうりも地辺干に棘をへこむすすく草の減方
確へもよ減すくうへて三升少減とすと掛干ハ三升少
城へもよ基減すくうへて三升少減とすと掛干ハ三升少
北の國へもよ大阪府へ小稲登る草を悉く掛干にあ
らへ減すくうく草乃は性よるとへ重慶少枝翠す

はへー乾中園東御廻るるべく各樹干下と細々
トカヨ是ふすも家作乃よりまうん

○田原川水へ若の日和と見合ひか及ばケリの雨
降ふ事すれど後宮刈向伏よアビ

○掛干に毛とハ麦荷地ふへて手引仕事

○稻を板母へかへ坐く隙いとども夜更之する出来
心静よねまきあて便利キ

○板干二日すと一日手引又ハ手引も宜一也れハ

け手方減らすなり

○板干の時乃日志木居宅のあみ取り常に脚筋
こころ二眼もうみて所ハ三眼ハ野菜あると多くハ先失
奉事す年く乃傳もあ

○薑の干方よく乾あきハ煮立候ふる
○干越ハニテ一もつらぬき

○板干の時手アリネモくね
○白朮一ふむよほまつす

○酒末公用すに舟、算利方より

提州鳴ト郡きの末ハ池田舟乃船主お約定
キ石五六疋直買入又萬人合谷末河
良舟、末に及ミ上乗ヨリノ接見をられて車度も
接引字車うす等有ハして掛干に之を

○ため一具子に掛干にそれ、末の賣車度至石子
極て三四丈へと直すと之を

○薑の乾き干しにて後ては子へ其先へと薑子
生ぜ一ひる車あれば掛干ハ薑の乾きよし

べもありの急ひのとす

○役車たる一具子に末の賣車度至石子或も
掛干船へ極そて收末舟(是今掛干の
体徳多)

○走反舟車斗立升船と積つと

千町、千石

千方町、千方千石

百万町、拾七万石

金へ石の如く解ふうくとも亦と算す利方の厚い

てあきゆりのすれに國人の此書を解け、勢て無が
仕ゆへ先五升米益ゆく思ひても拾万町余を
五万石ノ所慶ゆべ一人の農家ノよりあふるを
絶ゆりとては徳有事を見ゆるふもへ冥加るを
及みゆれや哉一あぐの嘗て我まへそく思へりて降
く附に自家しどの唐一國ふ聞ふうきよ附の農工商家おの
ほく樂む理あると一那の長なれば術を試てあへぬん
事成程事あてせ掛干乃より文化紀元の頃除蟻乃方

真麻農家の跡小ありべき事よりも書集え大和の縣
金口よりつゝ梓にふ一あい老農茶話と号一都下
竹之助一のむらすみれ湖東兒野氏集ありて
祖又が農家のりた集えたる茶野所より是が潤色して
持よのほさんと題りその中水稿乃よりとては無干れり
すり水想きくそよすりゆる人手とすやもの志乃
同に水清くさくよすり未生すりのよき圓不^ト
せぐと心の切あまぶやかして所へぬはひよ兒野氏乃

農稼業更かすり予へ方済よりとより又銀もすき
久人利の術を施さんとやひだりとゞよ御幸
トノ紙書して持たうるをもし度くせし御片
を大まかうんう

文政九丙戌年再版

附録

田て作つては國而古時と氣候を暖かよ
すゞづ仕方なると行と一榮から論じて
もどもあらへて予が聞たる所とあらぬ
是ハ此書でこそその利方あるんとおりよ不あ
可て誠ちひ其土地よ相應にて利とあらとわ
れが年來せゆせよかとぞ

苗代の半

諸國少て苗代すと見およよ多く田地小もる
而多く春うて荷風きりの二年每小而いか
ゆるときハ苗肥てすとやに生茂る根もあげく
固ふうはよよく紀て常々葉は仲方も宜ト
繁比骨と細に刻ミよく端くも堵てあ
すたが田ふうりして後櫻生れるとかと去勢
比口傳うり

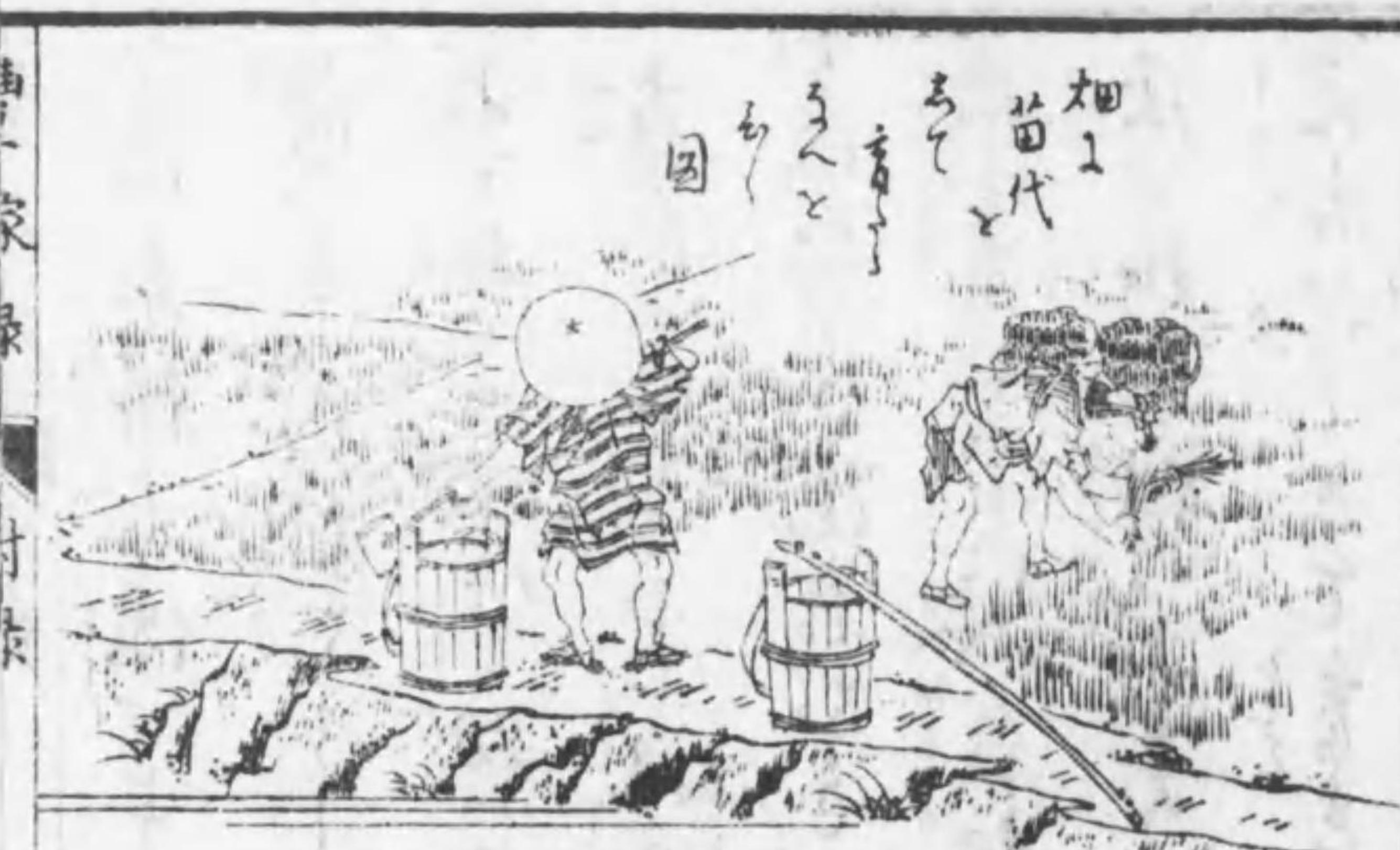
○又一耕苗麻ハ前年比を耕一並塊と能シた
伍小疇と立水比すと小なりて先角塊せう
すれど一並前付の時すれど塊と細ん碎き
土とあく一水と入高低とあくとねとすくと
あくと九州毛少て山芝とめと能すよ端
こうと上土と隨分急入てあくと芝は枝生す
素す下れすくもあくやしてねとすくと
○又水入多く種もねてねえふむもあくも

是れあへて水を入て、踏ざるやうにすべーとおは
の小西氏もつま

○穀て前といへりく前が利かよろ一秋の種早
くつて実のつむよろ一前付て後七日にして
千一日能日和小町へたゞくひゆうてねと見てても
干に及ばずア干や否ゑあらずて水を立時再い
はああだべー実干ハ二日とかぎりとれ〇は
なるとれ雨うすどよどく水を入されば雨りと
ぞふらやほきなめあり

○田と地。といひ國而少てくやうとせば平がて見
ぬ老のある所よやうざれどもすなまとさく
紀すあり地田と地とくに済済の論れども敵てた
まく仕立浦。地利ありゆくう多くる草
ち中に根十方にはじまると上の成也もよく植つて

たるにう合よされば實つてれどもうきいあ
たされざりバ秋すゑとくへ里
○旱魃と熱する地より烟小苗代とあら前へ
水あき而小成長したる苗と水中に植えられ
水育てて生貨うまば生立達わて何やど
旱魃たるもかくても先苗床小すき地
上烟と拂ふべし上田小野てりてば烟子て
角ともよろ一



○前年耕一塊とよくもどたやくうひて立おき
前づきとれ引あへたり塊と細うに碑を糞
ねとおうへうて板ハ二日ほど水つけ並て前づ
お廢し土へ雨ふ少て犯良せむとより日小乾
うに水を濁れもあき而繁るいよ素霧といはず
廢小底あへり入並板すみてもとてとくらす
廢と和一板の上よりあらうけて廢へ一尚追
乞合犯一あて育生せ勢ひよく生え立りのありた

低田の水多くて乾くとあき地少らぬべし 畑水で
そよみてたる苗うねば路縫水深溝通の如い却る
猶換するかのれ水と多くて干すとあら
植庵

○おほ國伊丹の近き少てい右つて苗代も打
水とちづて又一入金雨水と干すと多くは
苗うちらん樹之此れに干半、半植にて旱魃
小苗のつるぬざる用をありとぞ又半植にて一處

まとも水とねどり田をかきうちの干しれを
とめあ能^{えんのう} 獣肉^{けいにく}で用^{もち}て
さづてをまといげ子^こよれりふ押^{おお}し^{おお}げ時苗^{ときなわ}
葉赤くあれどもとくもおどろくとあく多く
内^{うち}の生^{なま}は二四日のうち小苗^{ちごみ}の勢^{せい}ひ十分^{じゅうぶん}かふあく却^{がく}る
や萬^{まん}度^ど成長^{せいりょう}つともやー^ーとくかくせん
すれども

○すべて生^{なま}れ草木^{くさき}よつると雌雄^{めいゆう}の備^{そなへ}るの

か一^かが一^かて果木^{くだり}雌^めよかぎり実^みうねど雄^おい丈^{じよ}
実^みの^{じよ}ばませ新^{しん}ら雌雄^{めいゆう}も実^みの^{じよ}とくらも雄^お
おもむり地中^{ちゆう}縮^くハス穀^この長^なき^な秋^{あき}雌雄^{めいゆう}に^かくび
とりて種^{たね}すとすべー農家^{うきゅう}はよもあらざれども
種^{たね}よもかゆうて粒^{こず}多く付^つく^く雌^めと見^みべー此^こ
唯^い雄^おの園農稼業車^{けいぎょうしゃ}に生^なれり^な英^{えい}と人^{ひと}量^{りょう}
えりよべー

○田^たて川^{かわ}よひ筋^{せん}小^こづく^{づく}て干^かせば萬^{まん}勢^{せい}弱^{わき}

あふううるてあれどもほかうきておそく水小き
いよ一米多く春雇うあく販ふ禁くらへ時匠
きうれども麦筋筋よりまば一既あから論トドガ
麦とすうざる地又いあひと作地うどハアシビ

おぞく刈廬

鳥糞の草

細ちせ地うて田のすあきを而も鳥糞を植へ
種まつるく行りて粒あり穀の農業全あら

占城稻ハ穀生て米白く粒さへ九九則ある
此稻徧とばんぐんとて作まう保ふ稻よす
粒う食へて味よく種して病人食へては
つるをあく徧の種乃もまきまつて武ニすか
まきかくもく茎の紫せどく又粒生て常徧の
金糞鳥糞の徧とてアケウツモバニシムア
御ノ一灌が田徧小うづば収納ゆる之

農家のもの半

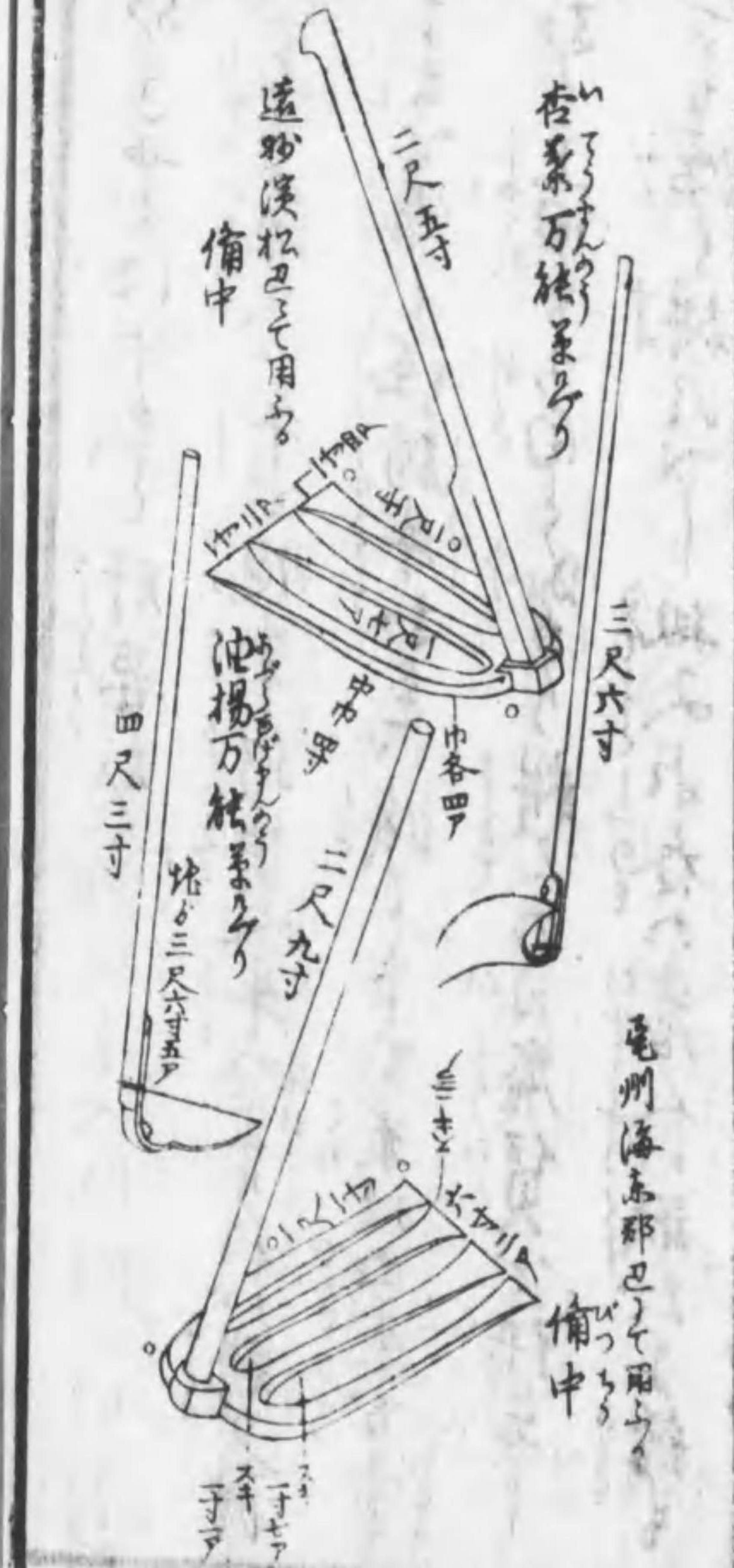
耕作いた御城とて耕してすまば生あり
やんねおりふ人もりびれど人同生食第一は業に
て植りの時をもげさだ去地と拂ひせうけ引
智らる農人と魚農とハ大うるは失あり田畠多く
修る農人一人とまふう引大車より先動のひ男
かくると見立第一うるはか勤者ふ、雇农とて
せて主附とよがさび植付とへ刈納のわけ間

あきやにすと肝要あり

○上の農人牛と田牛耕業之牛つよられ耕うて
よとゆく鷹牛もとば浅く一て米は出来方す
多く上田も田角も耕人の日雇賃と倍牛一
手も済く耕はべ一板又水谷の農人ハ敏だよ縛
名びて田とおうじとわう景あを其塊をす
村の長ようせ活つて、安らのく近は真め向河武
お住まひ人咸内とて用する備中歎てえあひ

豊穣録 阿鍔

耙ハシてつづよお湯タマ耕ハシて宣アシソヘア尾テをの國クニで用スル備ハサウエ中ヒハ鉢ハシと喝ハシ火形ヒメイで拂ハシ去ハシよつて便利ハシ宜ハシキナリナリとあひにひせら



此形の通ハシは假ハシせとつづひ反ハシりのうすすびて若具ハシのきくハシときれざるとふてハ一日一年一生ハシ替ハシたす。候德ハシり歲内ハシの農人ハシ農具ハシからうすに拂ハシよしたすに假ハシて用スルとつづられ則東ハシねきの國ハシからハ鉢ハシが小用ハシひざる而ハシりて農具ハシもあひど味畠ハシすり麦道ハシが貧ハシうれしてまくの是ハシ具ハシうけとば家造ハシりい生ハシ来ハシぐ又武家ハシい勤道ハシ具ハシとて若用ハシせのそろひざれざまをあり

○夏と冬とをもはれとば農具を用ふ
まづ御ひざるをもあつべー農具の夏と冬が著

一たる農具便利繕ふ又合算べー

○地場と歎先とせよとすとあがきせを
きとすう少しもあ田畠と廣くせんとするの
竹と用およべと是い益城小堺から罪へうり
てててとよ益城とありて交配ーなると竹と又
竹とよ家ふさぬの変種とすとすに上

松もふきゆにうりたる又ちる竹と木と竹と
きもとと耳及び重きほど寫りきいき一物しき
の才一きり

○農家にて八十石以上の中子娘ふき田舎にて
ふきがり修りとて家にて修りおり外の種類
のりと作ひべー多代継てわが子並入用丈
でふーをひべー又年季をひく人すほが毛
と付おれ袖とすと同トくはうちがく修り

つまひてあり何往山中村里少しお寧下
あへりのあとから付びまとあり結銀けいぎん下男
下女、結銀けいぎんをそれくめりと謂いわゆるて是子娘
年季ねんき此小男こまご小女おとめあるが給むだせりの才覺さいじやく致いたさ
すをゆゑかへせざれど却よつて失うしな失うしな立たての
あり家半けんぱん立たてのつもと

肥こやトは夏

○于鰯油ういんゆ糟さけと金札きんさつとりと金紙きんしとり

- 細ほのよりのあきバカばかふふとくふとく一農家いのうけは方かた之の
○灰ほす浦ららの藻いのと肉にく犯はんとり
○塗ぬちりづづな漆うるを壁かべに付つけて水みず犯はんとり
○人ひと糞ふ小役せうじ魚鳥うおとりの河かい水みず犯はんとり
○山さん走はしる糞ふ厩肥牛けいひ肥牛ひ馬ば犯はんとり、
右ひ備中びっちゅう川合氏かわあの傳つた

げ外ほかを園いんにようて務むむ綿实めんじの油糟ゆさけ鴉油うとうゆ
うど常じょうじょうに用もちる之の茶ぢと刈うて田たの麦むぎとす

てハ諸國中すとすとあり九州を出て山からき材
里少て、山紫やましの（桿とさこ木指す）あれば、新本は善葉日本之油傳は
てお本の刈株よ出る善葉えもんとて、此山紫と青紫と
てめき島代小も田ふもふくらむかきもくじそ菊と
桔子あり、豐後紀よののちことて用ふるとありれども蔬
紫代米むらことて庭列ていりん竹茶ふす称せよ、肥國よ端う
て並膳ひがんも宣よろすあれども、豐後ぶぜん芭蕉ひじ紀アト後アヒ毛ウの
あら葉林すみすと氣味きみゆうとて此香このかをあよきアヨキる
人ヒトあり、予ヨ、西園シガの產うぶあり、此種このくすとよきと知スル

に接すに此種このくすとよきと右書アマいは紫は香種このく
の匂においりと、此香このかの氣きふうつうなるあくと是也
江戸の人練馬大根だいこん、臭味においううとて種たね失すれども
畿内きないの者の口くちを苦くるがで、其その地ぢをあくし、
さうもくうさうもくうすとよきのあり、江戸こうとからハ石屋いしやて田乃
紀き一、小用こようふき采病ひぎうえん人ひとうすく、中なかくく忍しのぐれ
耐たまてハくうくうくうくうばとる。○英波國えいぱくこくとて、ハ池いけうは
をくう紀きにて、作つく和わけり、此地しえは昔むかより贋くわ良よ

とまづ是油の煙ふ大歎なとばかりは更に
米いそを御方れ古上り奉とあるよ一もくと
まづ國少て油う處が大切ゆて北國へおきば田の肥
しに用ひたきのありれ一此へやう用ひよハ
まわくは農家少くへくあると
○もとて北國の煙は茎券もて様にへりおまよ
くもうなと行くより歎かき切きくよき牛の
筋みて通一も本丸もあきやうにて

年々も烟へ入る一此おうれ松とても後入る
記一とたから仰ぬよほどよくもあら太坂よ
象川場との海より本津羅岐猪間住吉大和川を
往者海と見て海ぬあれども太坂坐ておる前此
ちうゆたとば日ゑねとじ山れどつて行くと
らうて右ひよでく松とあつて烟は入野菜綿
藍あと仰へ化よ増りてえ半分多くうるて行
ぐとあら是と見て考ふる小作ぬ農人の情

かによると 旅宿あり

此附添は記入所を手が写する事あらず。また
手書きハ絶たばれにて多くうぐいすの如きも多る
べからず。まことにすとそを用ひゆゑて何より手が
激辛もむかへり。——

豊稼録附録終

曲京三條通升屋町

出雲寺文次郎

同寺町通松原下ル

勝村治右衛門

大阪心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同安堂寺町

秋田屋太右衛門

東京横山町二丁目

出雲寺萬次郎

同日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同芝神明前

岡田屋嘉七

同馬喰町四丁目

吉田屋文三郎

書肆

終